

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13350

研究課題名(和文) 山岳参詣における木太刀奉納習俗と大山御師の身分形成過程の調査・研究

研究課題名(英文) The study on the practice of offering long wooden swords as part of the mountain worship in Oyama and on the process of Oyama Oshi Shinto priests attaining higher ranks in society

研究代表者

飯田 隆夫(iida, takao)

佛教大学・総合研究所・特別研究員

研究者番号：80837261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世期の(1)相模大山木太奉納習俗と御師、(2)徳川幕府の宗教政策と大山御師の身分形成の検討を目的に取り組んだ。(1)は、関東地域に保存される22振りの木太刀を調査し木太刀の形状・奉納者・時期を特定し、これらを書物上の言説と照合し、この習俗の経年変化を『千葉史学』81号で発表した。木太刀奉納の起源は、初代市川団十郎の元禄6年「自記」や大山寺山法、御師の動向から元禄15年～享保2年が妥当との知見を『演劇学論集』76巻で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

絵馬は、馬図・社寺参詣図・武者絵・船絵馬・算額などのように社寺に祈願・報謝のために奉納されるのが一般的であり、山岳参詣地において様々なものがみられるが、江戸時代の相模大山寺へ隅田川で水垢離を済ませ木太刀を奉納する固有の習俗が大流行していた。この木太刀に関しては、沼野嘉彦(1979)や吉岡清司(1992)らの研究があるが、これらは建久3年の北条政子の安産祈願に依ったものに過ぎない。本研究は、この習俗の発生源と現存木太刀の調査・整理を明らかにし、木太刀奉納の拡大には、御師の媒介や御師の行動が鍵となるとの仮説に立つ。

研究成果の概要(英文)： This study discusses the practice of offering long wooden Tachi swords and the role which Oshi priests played in Sagami-Oyama in early-modern times Part(1) and the Tokugawa government's religious policy and the process of Oyama Oshi priests attaining higher ranks in society Part (2). Part (1) carries reports on the shapes, the dedicators and the chronology of twenty-two long wooden Tachi swords preserved in the Kanto region, with reference to documentary records on these swords. Details of the gradual changes in the practice are printed in "Chiba Historical Science" (No.81). My view as to the origin of the practice of offering long wooden Tachi swords was published in "Collected Theories of Drama" (Vol. 76), where I concluded that the practice dates back to Genroku 15-Kyouho 2, based on "Writing by Myself" by Ichikawa Danjuro the First (Genroku 6), the Oyama Temple Rules, and the behavior of Oshi priests.

研究分野：人文学

キーワード：木太刀奉納 初代市川団十郎願文 中橋桶町 大山寺山法 真名本大山寺縁起 牛王札 遊民 御師

1. 研究開始当初の背景

相模国大山信仰は、『伊勢原の歴史』・『伊勢原市史』(1986～2009年)の刊行により、通史・資料面の基礎的資料が整備され全体像が明らかにされた。また、大山門前町・大山講分布・大山不動靈験記・幕末明治維新期の神仏分離の推移などは圭室文雄編『大山信仰』(1992年)により歴史学・地理学・民俗学から研究が進み、大山信仰が近世期関東一円の庶民層に浸透したことが明確にされた。こうした自治体史編集及び研究論集の成果は大きい。御師の発生時期・御師身分的地位・役割に関する研究は詳らかでない。これらの点への関心が本研究の背景である。

2. 研究の目的

自治体史及び先行研究成果を踏まえた上で、本研究の目的は、(1)木太刀奉納習俗は大山信仰の特徴的習俗であると考え、この習俗の起源や意義を明らかにすることと、(2)古儀真言宗寺院の大山寺に対する徳川幕府の宗教と御師身分の形成過程の調査研究をすすめることの2点においた。

3. 研究の方法

(1) 現存木太刀保存寺社(阿夫利神社・大山寺)・地域(川越市・東御市)の現地調査、木太刀奉納に関する近世記録(地誌・談義本・滑稽本・浄瑠璃など)の比較検討、「元祖市川團十郎自記」(早稲田大学演劇博物館蔵)及び大山寺山法による照合を主に行った。
(2) は、徳川幕府の宗教政策は、寛永16年筑波山知足院・南宮大社・大山寺対象に『南宮大社資料集』・『近世社寺建築調査報告書』(群馬県・神奈川県)をもとに、大山御師身分は、寛永14年真名本「大山縁起」(内閣文庫蔵)と「大山寺山法」(『伊勢原市史』資料編)などにより検討を行った。

4. 研究成果

『千葉史学』81号では以下の諸点を明らかにした。
(1) 現存木太刀の特徴 奉納時期・奉納者・所蔵元が特定可能な22振を年代別に調査した結果、初見の木太刀は享保2年銘、江戸中橋桶町家根屋講中、木太刀の総長は2m以下3振、3.2～4m振、3～4m7振、4m～5m3振5m以上1振で他3振は金物太刀、最小の木太刀は、「神田住吉廣花押」(世田谷郷土資料館蔵)総長30.5cm、奉納宛先は、「不動明王+石尊権現・大小天狗」、「石尊権現(大小天狗)」の2種類、長野県東御市津津地区の講中は、天明元年以来180年にわたり113振が継続奉納された、奉納者地域別では、江戸庶民が8振、江戸以外庶民が14振で、これらのうち8振は大山御師の持場が『開導記』から特定可能などの諸点を明らかにした。
(2) 書物上の描写 木太刀奉納に関して地誌・談義本・滑稽本・浄瑠璃・風俗誌などの書物の検討から、『江戸砂子』『再版増補江戸惣鹿子名所大全』『水濃行辺』『当世坐持咄』などは、木太刀を担ぐ人々を「中人」・博徒・鳶と表現するのに対し、『納太刀誉鑑』『大山不動靈験記』などでは、木太刀奉納によるご利益を強調する変化が見られた。

『演劇学論集』76巻では以下の点を明らかにした。
(3) 元禄3年、初代市川團十郎が大山寺へ木太刀奉納を誓約した背景要因 貞享2年市村座で「金平六条通」で荒事を初演したこと、延宝7年、古浄瑠璃の和泉太夫親子が演じた「不動明王利剣巻」を目にする環境にあったこと、大山街道では、万治元年、辻堂四ツ谷に木製鳥居が建造され、「お花講」の兆候がみられ、延宝2年の大山寺山法で御師の行動規制が制定されたことなどから、初代團十郎は、代参により木太刀を奉納したと考えられる。
(4) 初代團十郎の元禄10年作品の影響 元禄10年正月「参会名護屋」で「暫く」「鞘当て」「草履打ち」の荒事を御師・代参を交えて不動明王の利剣・神霊事や 同年5月「兵根元曾我」で大山寺眼前の相模川を舞台に曾我物を通じ「大力」が演じたことにより江戸芝居町の観衆の評判を得た。
(5) 大山木太刀奉納の起源 享保2年、江戸中橋桶町家根屋講中の木太刀 中橋桶町は江戸芝居町に近接し、江戸浄瑠璃の発祥地・歌舞伎芝居の太鼓櫓を許可された由緒の地で、元禄10年初代市川團十郎作品に最も影響された人々であったこと、中橋桶町は大山御師源大夫の持場であったこと、享保初期は、大山御師の檀家獲得の動きが活発化し、御師数急増の時期にあたることなどから、元禄15年～享保2年当時が、大山木太刀奉納の起源であり、この習俗には大山御師の介在が関係することを明らかにした。

「研究の目的」(2)は、①内閣文庫本の寛永 14 年真名本「大山寺縁起」は、続群書類従本を底本に多数の補訂がされ、大山寺縁起の祖本とはかけ離れているのに対し、正保 2 年内海景弓本は、粗本により近いとの立証過程であること、元禄年間、仮名本大山寺縁起の流布に歩調を合わせ、大山御師の檀那場への活動の活発化に伴い大山寺山法により大山寺別当による御師の統制・身分規定が進むことを検証する段階である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 飯田隆夫	4. 巻 27
2. 論文標題 『大山不動靈験記』における靈験主の考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 17、26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 飯田隆夫	4. 巻 81
2. 論文標題 近世期、相模大山の奉納木太刀と書物の描写	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉史学	6. 最初と最後の頁 54,63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 飯田隆夫	4. 巻 76
2. 論文標題 相模大山木太刀奉納の起源 初代市川団十郎願文を介して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 演劇学論集	6. 最初と最後の頁 1,16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------